

記号と論理、一九六十年代のドゥルーズ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上利, 博規 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000451

記号と論理、一九六十年代のドゥルーズ

上 利 博 規

"Plain superficiality is the character of a speech..."
The Dynamics of a Parti-cle ⁽¹⁾

序

なぜ単なる音の連続であった外国語が、ある時突然その意味をもったものとして理解されるようになるのか。あるいは、なぜ幼児は言葉の内容が理解できるようになる以前から、言葉が何か意味をもっているだろうことを予感できるのか。

ドゥルーズは『意味の論理学』において、ルイス・キャロルの意味のパラドクスとストア学派の出来事の論理学をもってこれらの問いに答えようとする。ドゥルーズによれば、ルイス・キャロルは非物質的な意味に関するパラドクスを作り上げ、ストア学派はプラトンによる「物質とイデア」の区別にかえて「物質的原因と非物質的効果」という区別を提起した。両者が想定する非物質性を言語平面と考えるドゥルーズは、「論理的で精神分析的な小説風の試論」⁽²⁾としての『意味の論理学』において、身体のごわめきと言葉とがもはや混同されることのないように引かれた境界線に沿って展開される表層的効果がいかなるものかを追跡する。

本論は、まず六十年代のドゥルーズが、ロゴスに依拠した伝統的な哲学に替えて、徴（記号）から始まる新しい思考を提示しようとしていたことを示し、そのような新しい思考は六十年代最後の著作である『意味の論理学』において述べられているルイス・キャロルの意味のパラドクスとストア学派の出来事の論理学が示すような、身体の深層から浮上し言語の表層で展開されるものであり、一般の記号論や論理学が前提しているような命題を指示作用へと還元するものではないことを示すことを意図している。

第一章 記号と論理をめぐる六十年代のドゥルーズ

第一節 六十年代のドゥルーズと「思考のイメージ」

一般に、記号に関する学は、ソシュール(Ferdinand de Saussure, 1875～1913)に由来する記号学 sémiologie とパース(Charles Sanders Peirce, 1839～1914)に由来する記号論 semiotic(s) との二つがあり、両者の相違は記号という概念の中に文化的所産以外の自然的なもの、たとえば黒雲は雨の徴(記号)であるといったことなどを含めるか否かにあると理解されている。

記号という言葉は、ギリシア語の Σήμειων に由来し、「ヒポクラテスの誓い」で有名な古代ギリシアの医師ヒポクラテス(B.C.459～350)がこの言葉を医学的徴候という意味で使用しているように、記号学 Σημειωτικήは古代、中世と医学的な診断の場面において用いられることが多かった。

この医学的診断学としての Σημειωτικήという言葉が今日のような記号学・記号論という意味で用いたのがジョン・ロック(1632-1704)であり、彼が『人間知性論』の最後で記号学を論理学とみなしたことは広く知られている⁽³⁾。そして、パースも彼の影響下で人間の思考過程における記号の働きに注目し、記号論を構想したのであった。

ところが、このような近代における記号論と論理学の結びつきに対し、ドゥルーズは全く違った「記号と論理」へのアプローチを示している。とはいうものの、ドゥルーズの思想を考える際には、一九七〇年代からフェリックス＝ガタリとの共著のスタイルを取る『アンチ・オイディプス』や『ミル・プラトー』などを発表する以前と以後で区別する必要がある。たとえば、『ミル・プラトー』では、「5 BC587年、AD70年 いくつかの記号の体制について」という章が設けられているが、ここにガタリの思想が色濃く反映していることは明らかである。

そこで六十年代までのドゥルーズに目を向けるならば、たとえば『ニーチェと哲学』(1962)には既に次のような記述がある。「或る事象(人間的、生物学的現象、あるいは物理的現象さえ)の意味を知ろうとする場合、その事象を所有し横領し占有している力が、また現われでさえもなく、自身の意味を現実的な力の中に見出す一つの記号であり、徴候である。哲学はすみからすみまで徴候学であり、記号学である。諸科学は徴候学的、記号学的な一体系である。」ここに述べられているような徴候や記号(signe、徴⁽⁴⁾)への関心は、『プルーストとシーニュ』(1964)において全面的に展開され、さらに『意味の論理学』(1969)

へと発展させられてゆく。

しかし、「記号と論理」をめぐる六十年代のドゥルーズについて考える時、見逃すことのできない重要な手掛りを与えるものがもう一つ存在している。それは68年に提出された博士論文『差異と反復』である。『差異と反復』の第三章は「思考のイマージュ」と題されているのであるが、それは『プルーストとシーニュ』の結論の表題と同一なのである⁽⁵⁾。また『意味の論理学』の第三十一のセリーの表題も「思考について」となっている。これらの間には、何が重要な結びつきがあるのだろうか。また、それは「記号と論理」といかなる関係にあるものなのだろうか。

第二節 「ロゴスの哲学」から「徴の思考」へ —— 『プルーストとシーニュ』

『プルーストとシーニュ』の「結論 思考のイマージュ」でドゥルーズは次のように述べている。「『失われた時間』は、何よりもまず、真実の探求である。…それは哲学と競争する。プルーストは、哲学のイマージュに対立する、思考のイマージュを作りあげる。」では、哲学と思考はいかなる違いをもつのか。

その違いは、思考は主体の意志によって始められるものではないが、哲学は予め積極的意志を所有して思考を開始する、そのため哲学は抽象的真理しか手にできず、誰をも動かすことができない、という点にある。たとえばドゥルーズは「思考という積極的意志、真なるものへの欲求や自然的な愛が人間の中にあると想定するのは哲学のおかす誤りである」と述べる。

ドゥルーズが徴（記号）にこだわるのはこのためである。思考は意志によってではなく出会いの偶然によって、しかも暴力的な強制によって始まる。ドゥルーズはいう。「われわれに探求を強要し、われわれから平和を奪うシーニュの暴力が常に存在している。真実は親和的關係や積極的意志によっては見出されず、無意志的シーニュにおいておのずからあらわれる。」

ドゥルーズが、ロゴスによる理性的で分析的な知に対置するものが、包含されたものにおいて真実の探求を強いるものとしてのシーニュにほかならない。ロゴスの知においては、知がその対象よりも常に先んじて存在し、知は既に曖昧な形でではあるが知られていたものをその根拠とともに再発見する。それに対して、出会いの対象としてのシーニュは、もはや認識される対象ではなく、力を振るう事物であり、そこに包含され包括されたものにおいて真実を探求することを強いるものである。これが哲学に対置された「思考のイマージュ」である。

したがって、思考が始まるために求められるわれわれの能力とは、もはやロ

ゴスではない。それは、「知性が常にあとからくることを示すような、非論理的で、分断されたわれわれの能力の使用」であり、シーニュを感じ取り、シーニュには巻き込まれた意味が存在することを予感する能力である。そして、思考するとは、シーニュに巻き込まれている潜在的意味を解釈し、展開することである。それは、シーニュに即して行なわれるシーニュ自身の発展でもあるが、いずれにせよ、シーニュから始まる思考においては、まずシーニュとそこに隠された意味が与えられ、思考は遅れてやってくるのである。ドゥルーズは次のように述べる。「真実の探求者とは、恋人の表情に、嘘のシーニュを読み取る、嫉妬する者である。それは、印象の暴力に出会う限りにおいての、感覚的な人間である。…哲学は、すべての方法と積極的意志があっても、芸術作品の秘密の前では無意味である。思考する行為の発生としての創造は、常にシーニュから始まる。芸術作品は、シーニュを生ませるとともに、シーニュから生まれる。創造する者は、嫉妬する者のように、真実がおのずから現れるシーニュを監視する、神的な解釈者である。」

第三節 思考の開始と再開を阻害するもの —— 『差異と反復』

以上のような『プルーストとシーニュ』における、伝統的なロゴスの哲学とシーニュから出発する感受性の思考という対立は、『差異と反復』においても継承されている。しかし、ここで使用されている「思考のイマージュ」という言葉は、もはや『プルーストとシーニュ』におけるような使い方ではない。逆に、かつて「哲学のイマージュ」と呼ばれていたものに相当している。『差異と反復』において「思考のイマージュ」と呼ばれるものはドグマティックなものであり、「差異と反復という、すなわち哲学的な開始と再開という、二つの力を疎外する」ものなのである。ドゥルーズは、ここでは求めるべきシーニュの思考を、新たに「イマージュなき思考」と呼び直している。

右に引用した箇所でも明らかなように、『差異と反復』は、「哲学の開始と再開」を問題としている。「第三章 思考のイマージュ」の冒頭部分では、次のように述べられる。「哲学における開始の問題は、当然のことながら、きわめて微妙なものだとなつねに考えられてきた。」しかし、これまで考えられてきた哲学はその開始に関して誤ったイマージュを作り上げてしまった。そして、それが却って「イマージュなき思考」を阻害してきたのだとドゥルーズは考える。

このようなドゥルーズの考えは、『プルーストとシーニュ』と矛盾するわけではない。なぜなら、『差異と反復』で述べられている「イマージュなき思考」を

阻害する伝統的哲学における「思考のイマージュ」とは、『ブルーストとシーニュ』において述べられているロゴス的な伝統的哲学と同じだからである。そこでは、伝統的哲学は、シーニュとの出会いによって思考が始まるのではなく、常にロゴス的知・方法がシーニュとの出会いに先立ってしまっていることが批判されていた。「イマージュなき思考」とは、既に曖昧に知られているものの根拠を問うことを通してそれを明晰・確実なものにするような思考ではなく、シーニュに導かれて知られていないものに向かうことである。だからこそ、『差異と反復』の「はじめに」でドゥルーズは、「自分が知らないこと、あるいは適切に知らないことについて書くのではないとしたら、いったいどのようにして書けばよいのだろうか」と述べたのである。

「イマージュなき思考」、すなわち哲学の開始と再開としての差異と反復を阻害する「思考のイマージュ」として、ドゥルーズは八つの公準について述べる。それらを列挙するならば、思考することを自然な能力として考えること、思考能力はみんなが共有していると考え、主観という保証のもとで認識に関する諸能力は一致して働くと考えること、差異を類似なものへと還元する再認的な表象＝再現前化、学ぶ過程において必然的であるはずの間違えることを否定的に考えてしまうこと、命題においてその真偽だけを問題にし偽の命題にも意味を表現するという価値があることを無視してしまうこと、問題を思考することは問題を解決に導くことだと考えること、学ぶことを知ることへと還元すること、以上である。

これら八つの公準の中の、特に第六の公準では、『差異と反復』の翌年に公刊される『意味の論理学』で展開されることになるであろうナンセンスとパラドクスの問題が取り上げられている。すなわち、「指示の特権」と題された第六の公準が問題にするのは、命題の指示的次元（真偽）に対して表現的次元（意味）が無視されてきたことである。たとえば、ラッセルが『意味と真偽性』において「真と偽の問題は、言表された名辞や命題が指し示すものにかかわり、それらが表現するものには関わらない」と述べるような考えがこれである。

これに対し、ドゥルーズは意味作用 (signification) と意味 (sens) を区別し、意味作用がなくても意味が成立する⁽⁶⁾ことをもって、命題における表現的次元を浮き立たせようとする。こうして、経験的にはただのナンセンスやパラドクスと思われているものが、実は超越的な意味や理念のあり方を指し示す「秘密」となると考えられるのである。

続けて、ドゥルーズはルイス・キャロルに言及し、「二つの極限的なパラドク

スの間に、派生的ないくつものパラドクスがひしめきあい、それが、アリスの数々の冒険を形成するのである」と述べる。ここで「二つの極限的なパラドクス」と呼ばれているものの一つは、命題において表現されている意味を述べようとすると新たな命題が必要になり、さらにはその第二の命題の意味を説明するための第三の命題が呼び出される、という無限後退のパラドクスである。そしてもう一つは、命題から一つの幽霊のごとくにその意味が理念的出来事として引き出されるという意味の不毛性のパラドクスである。これら「無限後退のパラドクス」(二重化)と「意味の不毛のパラドクス」(二分化)というキャロルにおける二つのパラドクスは、たとえば前者は『鏡の国のアリス』第八章の騎士が発明した歌とその名の関係として、後者は『不思議の国のアリス』に登場するチェシャ猫として登場する。猫という意味作用を受けるものが消えた後にも、「猫の笑い」という意味、すなわち理念的出来事が残るのである。

われわれはここに『意味の論理学』が何を目指して書かれたかということを見て取ることができよう。それは、指示作用に還元されない命題における表現的意味の次元を示すことである。そして、それはアリスの数々の冒険が「二つの極限的なパラドクスの間に」ひしめきあっている派生的ないくつものパラドクスからなっていることを示すことを通してなされるのである。

ドゥルーズは『意味の論理学』の第三十三のセリーにおいて次のように述べている。「われわれは、彼ら(作者たち)自身が驚くべき診断者、驚くべき徴候学者だと言いたい。…徴候学の図表を作り直すことのできる臨床医は、芸術作品を作っているのである。逆にいえば、芸術家は臨床医である。彼らは自分自身の症例や、一般的な症例についての臨床医ではなく、文明の臨床医なのである。」既に『ニーチェと哲学』において、西洋哲学史に対するニーチェの哲学の意義を徴候学ないしは記号学として読み替えようとしていたドゥルーズは、ブルーストの『失われた時を求めて』をシーニュを一つ一つ習得してゆく文学機械と考え、『意味の論理学』ではそれを芸術家の働きとして捉えている。既に述べたように、近代においては記号が記憶や伝達における代理的機能という観点から見られるようになったが、それ以前には記号学が医学的な診断学とみなされることが主流であった。ドゥルーズはそのような徴候を通しての診断学という意味を組み込みながら、しかし単に医者のように患者を観察するだけでなく、同時に徴に心を打たれそこから思考へと強いられる自己変容の可能性を与えるものとして、文学、芸術、哲学の問題として捉えているのである。

第二章 『意味の論理学』における記号と論理

第一節 特異点とセリーとしての論理

とはいえ、『プルーストとシーニュ』と『意味の論理学』とを比較する時、次のような疑問が浮ぶ。前者においてドゥルーズは「アンチロゴス」という言葉に端的に表れているように記号を論理と対立するものと考え、プルーストの『失われた時を求めて』を記号を生産する文学機械とみなし、「アンチロゴス」と呼ばれる文学機械をロゴスの・論理的思考に対立するものとして捉えていた。ところが、『意味の論理学』では記号と論理は必ずしも対立的には捉えられていない。それはなぜか。『意味の論理学』で考えられている「記号と論理」の関係は、もちろんロックにおけるような記号学と論理学の等置ではあり得ない。それどころか、ドゥルーズは序文で「本書は論理的・精神分析的な小説風なひとつの試論である」と宣言しているのである。なぜ『意味の論理学』においては「論理」が肯定的に考えられているのか。この理由を次に考えてみよう。

『意味の論理学』は、意味の理論を形成する三十四のパラドクスのセリーから構成されており、それぞれのセリーには「トポスの・論理的な形象が対応している」(序文)。したがって、われわれは『意味の論理学』に関して、以下の点に注意しておく必要があるだろう。一つには、『プルーストとシーニュ』ではロゴス・論理が有機的な全体性・統一性を進めるものであるのに対し、『意味の論理学』ではもはや論理は全体性・統一性を与えるものとしては見なされておらず、「トポスの」と呼ばれているという点である。

ドゥルーズは『意味の論理学』において、言語を「表層という面」「表層を構成する諸セリーという線」「セリーにおける特異点」という三つの次元から構成されているものとみなす。とすれば、『意味の論理学』の三十四のセリーは、単にキャロルやストア学派の言語論に関する分析的記述なのではなく、それぞれの特異点を含んだ諸セリーが反響し合いながら一つの作品を構成していると考えられる。つまり、プルーストの『失われた時を求めて』が徴の習得のための文学機械であったように、ドゥルーズの『意味の論理学』もまた三十四のセリーにおけるトポスの論理を一つ一つ習得し、それらセリー間を循環し、セリー間の反響を経験する、いわば「記号と論理」に関わる一つの「イマージュなき思考」のための機械であるということが可能なのではなからうか。これが第二の点である。

第三の点は、「論理的」という言葉と並列されている「精神分析的」という言

葉が含む問題である。表層としての言語平面は、その下に生後一年間における幼児期という深層を隠している。音声は身体から分離され言語が可能となるためには、分離以前の幼児期における闘いが必要なのである。ドゥルーズは一方では個体発生とは関わらない意味の理念性の次元を示そうとするが、他方ではフロイトやメラニー・クライン、あるいはラカンなどの精神分析を参照しながら個体発生的な可能的条件にも言及するのである。あるいは次のようにいってもいいだろう。「食べる」か「話す」という口に関する物質的及び非物質的な二重の使用に関して、両者が混乱されることなく分離される態勢が確立される以前の「しゃぶる」あるいは「吸い込む」ことをめぐる口唇期の闘いがある、あるいは、表層としての言語平面のセリーは、フロイトが幼児性欲に関して述べているような「性感帯」と「性のセリー」から始まるのだと。こうして、ドゥルーズは次のように述べることになる。「アリスのいくつかの冒険があるのではなく、ただひとつの冒険だけがある。それは、彼女が表層に上がってくること、にせの深層に対する彼女の否認、すべてが境界線上で起こるという彼女の発見である。」つまり、『意味の論理学』が徴の習得の思想機械であるということは、また身体の深層に生きる者が特異点とセリーが反響し合うトポスの論理によって構成されている言語平面へと昇ってくる過程でもあるということである。

第二節 ストア学派における命題と非物体的なもの

『差異と反復』において理念的出来事としての意味に注目したドゥルーズは、エミール・ブレイエの『古代ストア学派における非物体的なものの理論』(1928)を通して、ストア学派における非物体的なもの(asomaton)の思考に着目する⁽⁷⁾。論理的に考えられた非物体的なものは、論理的命題の動詞として表現される。

『意味の論理学』第二のセリーでは、ブレイエの次のような印象的な文章が引用されている。「メスが肉を切るとき、…メスで切られるという新しい属性を作り出しているのである。…(ストア学派が区別した)ひとつの面は、深くて実在する存在、力であり、もうひとつは事実の面であり、後者は存在の表層で行なわれ、非物体的な存在の無限な多様性を構成する。」ここでいわれている「切られる」、あるいは木材が火で「焼かれる」と動詞で表現されるものは「非物体的な述語」である。ここに、「論理的な賓辞」と「事物の属性」とがその非実在性において一致する。

このようなストア学派の論理学は、名辞に基づいた概念相互の帰属関係を示

すアリストテレスの論理学と比較されることが多い。大切なことは、ストア学派の論理学は、アリストテレスのような世界の存在の類種的相互関係を確認することではない。アリストテレスでは存在者の分割が問題であったが、ストア学派においては物体と非物体との関係が問題にされているのである。彼らは、非物体的で単に思考の中にしかない「世界と人間との相互浸透」という出来事をいかにして作り出すか、論理学はそのためにかなる働きが可能かについて考えたのであった。そのため、彼らは感性が外界によって影響を受け、魂が自己変容を受けるといふことはどのようにして生まれるかということの問題にした。しかしそのような外界からの影響とは、決して肉体的な影響の問題なのではなく、非物体的な魂の問題なのである。そして、魂における自己変容が起こるのは、時間の中で展開される様々な出来事の諸関係を知ること（論理学）によってだったのである。

ドゥルーズは、このようなストア学派の論理学を『意味の論理学』における第五のセリーにおいて「ストア学派のパラドクス」と呼んでいる。しかし、これは『差異と反復』においてキャロルの二つの極限的なパラドクスの中の「意味の不毛のパラドクス」（二分化）と呼ばれていたものにほかならない。意味の不毛のパラドクスの説明として出されている「神が存在すること」「空が青くあること」という二つの例も全く同じである。しかし、『意味の論理学』では「この意味＝出来事の不毛性こそ、ストア学派の論理学の最も注目すべき点のひとつだった」と述べているのである。

ここからわれわれは序文の「ルイス・キャロルからストア学派へ」という言葉の真意を理解できるようになるのである。すなわち、『差異と反復』において提出された極限的な二つのパラドクスの内の一つである「意味の不毛のパラドクス」を、ストア学派の出来事の論理学によって「意味の論理学」として確かなものにすることが『意味の論理学』の意図するところなのである。もちろん、それによってキャロルの「意味の不毛のパラドクス」が捨てられるわけではない。

第三節 キャロルにおける意味のパラドクス

ストア学派の論理学の不毛性に対応するものとして、ドゥルーズはキャロルのハンプティ・ダンプティが告げるところの動詞の「不可入性」(impenetrability)をあげる。ドゥルーズは、「ハンプティ・ダンプティは、身体の能動と受動に出来事の無感動性を、事物の可食性に意味の非食用性を、物質の相互の混交・浸

透に、厚みのない非物体的なものの非浸透性を、深層の柔らかさに表層の抵抗を対立させる」という。

そして、不可入性は気位の高い動詞の理想的自由をも意味する。つまり、ストア学派が主張するように、命題の動詞は、真偽とは異なった次元において意味の自由をもつのである。「物体の運動」が一方向しかもたないのに対し、「命題における動詞」は運動の自由をもつ。『意味の論理学』のセリーが「純粋な生成変化」から始まるのはこのためである。良識 (good sense) は一つの良き方向 (sens、意味) を教える。しかし、「純粋な生成変化」は現在における同一性を破壊して、過去と未来へと分割された無限な同一性となり、一つだけの意味としての良識を破壊する。薬を飲んで大きくなりまた小さくなるアリスは、物体としてのアリスを大きくなることと小さくなることへと解体するのである。

キャロルは、一つの方向に流れていると思われる運動を逆転させるような例をいくつもあげている。たとえば、主語と目的語をつなぐ動詞の方向の逆転、つまり能動と受動の逆転(猫はコウモリを食べるか、コウモリは猫を食べるか)、あるいは原因と結果の逆転(過ちを犯す前に罰せられ、分ける前に給仕する)など。

キャロルの意味のパラドクスにおいて、中でも重要なものは、それが何を意味しているのか理解できないような秘教語と、二つのセリーへの分岐を進めるカバン語であろう。たとえば、『不思議の国のアリス』において濡れた身体を乾かすためにネズミが始めた「ドライな」話に登場する「それ」である。「それ」という言葉が何を意味するかは誰にもわからない。アヒルは「見ればわかる」のにといい、事物への指示によって意味を見たそうとするが、ネズミはそれに目もくれない。秘教語は、目で見ることができず亡霊のように出現・消滅を繰り返すスナークや、「あるもの」「それ」など特定化されることのない(空)白の語 (le mot blanc) にほかならない。

また、ハンプティ・ダンプティが使うカバン語 (portmanteau word, mots-valises) とは、「しなやか」 (lithe) と「ぬらぬら」 (slimy) を組み合わせて作られた「しならか」 (slithy) のようなものである。とはいえ、カバン語は単なる二つのセリーの組み合わせなのではなく、「意味の不毛性」を析出すること、つまり命題において事物から非物体的意味を分離させ、二つのセリーへの分岐を進めなければならない⁽⁸⁾。

たとえば、キャロルは「スナーク狩り」の試みを行なう。snake と shark を組み合わせて作られた snark は実在するはずもなく、またスナーク狩りをするこ

との真偽も決定されず、あるいはスナーク狩りによってキャロルの心情や信念が表明されるわけでもないが、にもかかわらずスナーク狩りは意味をもつ。物質と非物質の境界面で展開されるスナーク狩りは、注意深く指貫で(with thimble with care)、つまり「指貫」という物質と「注意深さ」という非物質で行なわれる。あるいは「フォーク」(fork)と「希望」(hope)という物質と非物質の二重性によって⁽⁹⁾。スナークが存在するのは、まさにこの物質と非物質の境界面だからにほかならない。

このような物質と非物質の二重性は、キャロルの作品の至るところにみいだせる。たとえば、『鏡の国』では、「鏡の国」で物質への関係なくしていかにして意味が生成するのかを実験する。あるいは『シルヴィーとブルーノ』の庭師の歌において。庭師は、言葉の類似を手掛りとしながら物質から非物質への二つのセリーを行き来し、その循環において一つの意味を理解する。たとえば、「ここでは実によく物が変わる。も一度見ると、間違いなく別物になっておる」という庭師は、第五章で次のような歌を歌う。

やつの見たのは一頭の巨象 そやつは横笛 (fife) 吹いていた、
思ったものの、も一度見れば なんとそやつは女房 (wife) の手紙。

「やれやれわかった」やつがいう、「これぞ人生 (life) のつらさかな」
ここでは、横笛が消滅し、女房の手紙 (letter、文字) へと移行し、その移行において「人生のつらさ」という意味が生まれているのである。

ところで、キャロルは『不思議の国のアリス』において、コーカスレースでぐるぐると同じ場所を回った後で「誰が勝ったのか」という問題を提出している。キャロルは「みんなが勝った」というが、ドゥルーズの答えはそれとは異なっている。ドゥルーズは、コーカスレースのような循環し、あるいは無限増殖するような途方もない思考可能性の存在に気づいた者が勝者だというのである。過去に何がおこったのか、また未来に何がおこりうるのか、この二つの問いに確定した答えを与えるのではなく、逆にこれらの問いを「純粋な生成変化」として捉え、そこに無限に問い続けるような特異点を見つけ出すこと、これこそキャロルの考えるゲームであり、ドゥルーズが考えるところの思考の勝利なのである。たとえば、ドゥルーズのみるところ、キャロルは数学者・論理学者として、人間の心理や感情を論理化することを通して人間を解体し、人間を非人称的な出来事へと解消しようとした。「もつれた物語」(A Tangled Tale) や「小辞の力学」(The Dynamics of a Parti-cle) において、キャロルは人間の心理や精神的現象を前人格的な特異性として表現することに努める。彼にとって、

数学化とは人間の感情の特異化なのである。ドゥルーズからみれば、それは事物から離脱した理念的意味という、言葉の無力でありかつ無限な力の証しにほかならない。

第四節 精神分析のセリーにおける非性化としての思考

動物として生まれたヒトは、やがては食べることと話すことを分離し、それによって言葉を話すようになる。身体的深層しかもたなかったものが、いかにして言語平面へと浮上してくるのか。この言語獲得の問題は、フロイトの「性に関する三つの論文」(1905)の第二論文以来、幼児性欲の問題ともなった。言語獲得の歴史は、幼児性欲の展開の歴史となったのである。

性器的性欲が確立する以前の幼児性欲の発達が口唇期・肛門期・男根期を経過するというフロイトの議論は広く知られているところである。このフロイトの議論において注目すべきなのは、一つには幼児において既に性感帯(erogene Zone)という身体的表層をもっているということ、さらに生命の自己保存的機能との混在していた性的活動は次第に独立した機能をもつようになるという点である。そして、フロイトは「おしゃぶり」という行為に注目し、しゃぶるという行為は栄養の吸収という生命維持とはもはや関係をもたないことを指摘する。つまり、「食べる」から「話す」への運動は、既に幼児期の「しゃぶる」という行為によって準備されているのである。

ドゥルーズは、セリーは性現象によって始まり、フロイトが示すような性欲の発達に伴ってセリーは三種類の変化過程を通して表層を組織すると考える。すなわち、一つは右に見たような前性的性現象としての性感帯のセリーであり、次に性器的性現象のセリーであり、最後に去勢的性現象のセリーである。第一のセリーは幼児性欲における性感帯という表層に基礎を置きながら、この性感帯に投射されたイメージとしての自己愛的対象を求めるところに成立する。したがって、この第一のセリーは性感帯という連続する同質的なものを総合したものとなる。第二のセリーは性器帯に基礎を置くものであり、性感帯の諸セリーを性感帯における特権的地位を占めるファリュスという核へと集中する。従って、ここでは同質性は失われる。第三のセリーは、ファリュスという特権的なものによって引き起こされるオイディプス・コンプレックスと去勢コンプレックスにおける父と母の分割、過剰と不足の分岐である。ここでは、ファリュスは同質的でも集中的でもなく、分岐させるものであり、分岐したものを共鳴させるものとなる。ここに父と母という交替するセリーとしての親のイメージ

が、あるいはクラインのいうところの抑鬱的態勢と共に「良き対象」という高さが形成される。

これが性のセリーの最後を飾る場面である。すなわち、死（不毛性）を招く去勢を通して幼児は高さに照射された非身体的表層へと浮上する。そして、身体の深層から離脱した性は、超越的な意味の次元を獲得し、非性化としての思考を始めるのである。これが、ナンセンスと共に意味が始まる地点である。言葉がある時突然音としてではなく、意味として聞かれるようになるのは、まさにこの時である。そして、このような態勢ができあがるためには、まず深層のノイズ (sous-sens) が、そして次に高層へと退いた声 (pré-sens) が、そして最後にナンセンス (non-sens) が必要なのである。

結 び

『ブルーストとシーニュ』に見られるようなドゥルーズの記号についての考えは、ロゴスに依拠する伝統的哲学に対し、徴に触発されて始まるような思考の可能性を問うものであった。そして、それは『差異と反復』や『意味の論理学』にも通じるものであった。

他方、徴から始まる思考が阻害されないためには、命題を指示的次元に閉じ込めず、徴を理念的自由へと開く必要があった。それは、意味を指示作用、表明作用、意味作用のいずれにも還元しないような、むしろ逆にそれらが生まれる条件となるような意味のあり方を確認することであった。そのために書かれたのが『意味の論理学』にほかならない。そのため『意味の論理学』は、キャロルの意味のパラドクスとナンセンス、及びストア学派の非物体としての出来事の論理学、そして最後に精神分析における深層から表層への生成を参照しながら、命題の表現的次元の構成を浮彫りにしようとした。

したがって、『意味の論理学』は、一方では一般的な記号論とは全く異なったドゥルーズの「徴の思考」を示していると共に、他方では一般的な形式論理学や記号論理学とも全く異なった「意味の論理学」を示しているといえよう。この意味において『意味の論理学』は『差異と反復』とともに、六十年代のドゥルーズの思想を総括的に飾っているように思われる。

しかし、既に述べたように七十年代以降は、ガタリの影響のもとでドゥルーズは新しい記号の理論を展開し始める。そして、ドゥルーズはもはや「表層」という考えに興味を示さなくなる。七十年代以降のドゥルーズとガタリの記号論については改めて論じなければならない。

(1) *The Complete Works of Lewis Carroll*, PENGUIN BOOKS, 1988, p.1016ff.

(2) 『意味の論理学』序文

(3) 『人間知性論』「生得思念について」「観念について」「言葉について」に続く第四巻「真知と臆見について」の第二十一章「学の区分について」において、ロックは人間の知性の範囲に入るのは、事物の本性・関係・作用の仕方、理知と意志をもつ人間が幸福の達成などの目的のために自分でなすべきこと、それら二つの知識を伝達する手段の三つであり、従って学問は大きく自然学、倫理学、記号論に区分されると考える。そして、記号論の説明として以下のように述べている。「三番目の部門は *semeiotike*、すなわち記号論と呼べよう。記号の最も通常のもは言葉だから、*logike* すなわち論理学と名づけるのも十分ふさわしい。その仕事は、物ごとを理解したり、物ごとの知識を他の人たちに伝えたりするために、心が使う記号の本姓を考察することである。というのは、心が観想する物ごとは、心自身を別として、どれも知性へ顕現しないから、知性の考察する物ごとの記号ないし表象として、他のあるものが知性へ顕現する必要がある。これが観念である。また、一人の人間の思想を作る観念の場面は、他人が直接あらわに眺めることができないし、記憶というすこぶる確かでない倉庫のほかにはどこにも蓄えることができないから、私達の思想を自分自身のために記録するだけでなく、互いに伝達しあうためにも、観念の記号は同じように必要である。人々が最も便利だと見いだしてきて、それゆえ一般に使う記号は分節音である。そこで、知識の大きな道具としての観念と言葉の考察は、人知をその全範囲にわたって眺めようとする者の観想の、軽視できない部分になる。そしておそらく、観念と言葉が判明に考量され、正しく考察されたら、私たちのこれまで熟知するのと別種な論理学と批評学が私たちに与えられるだろう。」

(4) *signe* (仏語、*sign* 英語) をいかに訳すべきかに関しては、すべての人が苦勞するところであるが、本論文においては記号、シーニュ、徴という言葉に適宜使用している。

(5) ただし、第三版では、「思考のイマージュ」は第1部の結論であり、第2部の結論は新たに書かれた「狂気の現存と機能」である。

(6) たとえば、「円の四角くあること」は、円と四角はその概念上矛盾するが故にその意味作用においては破綻しているが、なお一つの意味をもっているということである。

- (7) ストア学派は、四種の非物体を考える。すなわち、レクトン (lekton)、空虚、場所、時間である。レクトンは、一般にはソシユールのいうシニフィエに近いものとして理解されている。
- (8) ドゥルーズは『意味の論理学』第六セリーにおいて、フーコーの『レーモン・ルーセル』第二章で述べられている "les lettres du blanc sur les bandes du vieux pillard" と "les lettres du blanc sur les bandes du vieux billard" の関係に言及している。これは、文中の p と b が交替することによって、全く違った文意を構成してしまう例である。フーコー自身は、この問題に関して次のように述べている。「記号についての彼ら（十八世紀の文法学者）の純粹に經驗的な概念において、彼らは単語というものが、その「意味」(signification) に結び付けられている、目に見える形象から分離して、別の形象にくっつくことが可能であり、それを限界であると同時に財宝である両義性によって指し示しているということに簡単していたのだ。そこに言語は、言語にとって内的な一つの動きの起源を見出すのである — それが言うところのものとの言語のつながりは、その形が変わったりする必要なしに変貌しうる、それはまるで言語がみずからを軸にして回転し、ある固定点のまわりにもろもろの可能さのまさに円環というべきもの（当時言われていたように言えば、その「意味」sens だ）を描いて、さまざまな偶然、出会い、効果を、さらには遊びの、多少の差はあれ計画的な苦心の数々を可能ならしめているかのようだ。」
- (9) "You may seek it with thimbles -- and seek it with care
You may hunt it with forks and hope.", *The Complete Works of Lewis Carroll*, p.687